

玉音放送に至るまでの下村宏の事績と思想

— 松下幸之助との交流と共に

坂本慎一

序

下村宏（号は「海南」）を一言で表現するならば、玉音放送のプロデューサーと言うことができる。下村は、当時におけるラジオ放送の社会的影響力を鋭く見抜き、昭和天皇に玉音放送を進言した。さらに玉音の録音や放送の現場を指揮し、最後は昭和天皇と共に放送に出演したのである。

松下幸之助は、この下村と浅からぬ縁があった。昭和九（一九三四）年、朝日新聞副社長であった下村は、幸之助を「経営理念を持った実業家」として全国に紹介した。これは、ジャーナリストが幸之助の理念に注目した最初の事例のようである。下村は、学校教育をほとんど受けずに成功した実業家や、同郷の和歌山県出身の人を重んじていたので、幸之助を高く評価したのであった。また、筆者によるこれまでの研究で、幸之助の理念は昭和初期のラジオ放送から強い影響を受けた可能性が指摘されたが、下村もまたラジオ演説の名手として名高い人物であった。

戦後、下村はPHP運動に熱心に参加し、最初期『PHP』誌に最

も多く執筆した人物の一人となった。幸之助が新政治経済運動を興すと、東京常任世話人となつて、この運動を東京において推進することとなった。幸之助は道州制、教育改革、税制改革、観光立国など、その生涯において多くの政策提言を行なつたが、これらは戦前から下村が提唱していた内容とよく似ている。写真1は、昭和三〇（一九五五）年一月六日、幸之助の私邸・光雲荘で開催された音無会



写真1：昭和30（1955）年11月6日、光雲荘における音無会
（音無会発行『音無会三十年の歩み』11頁より）
〔手前中央に下村夫妻、その両脇に松下夫妻、幸之助の右に湯川秀樹〕

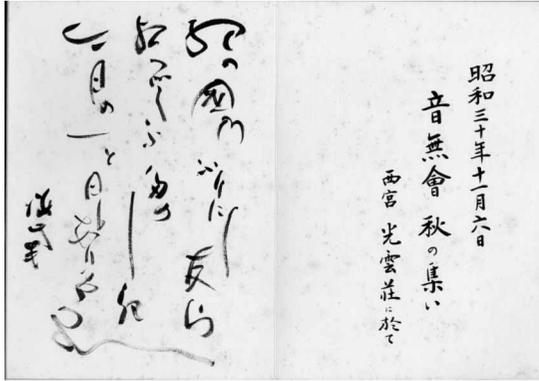


写真2：昭和30年11月6日、音無会の『芳名録』（PHP総合研究所第一研究本部所蔵）〔右に『芳名録』の日付や場所など、左に「紀の國のふりにし友ら相つどふたのしき今日の一日もありけり」という和歌と「海南」の署名〕

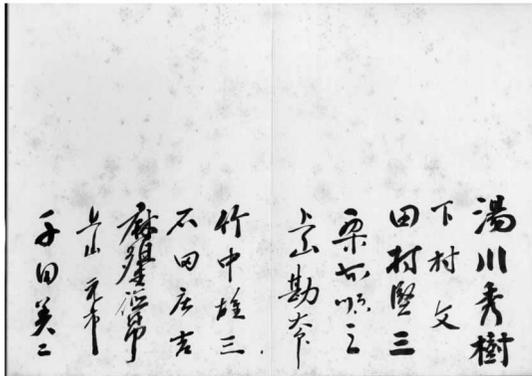


写真3：『芳名録』〔右から二番目に「下村文」（下村宏の妻）の署名〕

の写真である。音無会とは、和歌山県出身者の集まりであり、この時は「第二回臨時招待会（下村海南先生ご夫妻歓迎会）」と題している。この写真の中央手前に下村夫妻、その両脇に松下夫妻が写っている。幸之助の向って右には、当時ノーベル賞を受賞して国民的英雄になっていた湯川秀樹も写っている。この写真の並びから考えても、幸之助は下村に多大な敬意を払っていたと想像されよう。

幸之助は、九四歳まで生きた長命であった。日頃から心がけている健康法について質問された時、幸之助は次のように答えている。

幸之助の長寿を支えた要因の一つが下村の体操であったとすれば、ここにも八二歳まで生きた下村の影響を見ることが出来る。

まあ、朝起きたら十分間ほど体操するんですわ。戦争前に郷里の下村海南さんに教えてもらった普通の徒手体操ですよ。³⁾

下村は、日本における簡易保険の創設者であり、日本初のオリンピックとなるはずだった昭和一五（一九四〇）年東京オリンピックの責任者であった。また、戦前における道州制の最も熱心な提唱者であり、終戦の際には内閣情報

局総裁の立場にあつて命がけて玉音放送を実現した人物である。戦前において最も多くラジオに出演した演説家の一人であり、また演説の名手としても著名であった。これほどまでに重要な人物であるにもかかわらず、今日までわずかな研究がない。⁴⁾

本稿では、幸之助の思想や政策提言に影響を与えた可能性のある人物として下村を取りあげたい。本来であれば、戦後の下村との関わりが重要であり、両者が提言した政策の内容の比較も有意義である。しかし、ここでは、まず従来ほとんど研究がなされていない戦前の下村の事績を簡単に紹介することから始めたい。下村は

若い頃から日記を付けるなどしていたが、多くの災害で資料を焼失しており、今日国立国会図書館憲政資料室にわずかな資料が残っているだけである。本稿では、主に下村が生涯において残した七十余冊の書から、彼の事績に関する部分を抽出する方法を採用した。また、戦後の両者の交流は次稿の課題とし、本稿では戦前における両者の交流に注視する。最後に、下村による数々の政策提言は玉音放送と類似した発想が根底にあったと思われるので、その分析も行ないたい。

I 下村宏の事績

①通信省に入省するまで

下村宏の父である下村房次郎は、号を自知といい、安政三（一八五六）年、現在の和歌山市に生まれている。官僚、ジャーナリスト、経営者など多彩な経歴の持ち主であり、大正二（一九一三）年に没している。母の政枝については、父の散財で苦労したというほかに「僕の母は法華の信者である」と書いている。

下村宏は、明治八（一八七五）年三月一二日、和歌山市で生れた。後年の下村はラジオ演説の名手となるが、幼い頃から「臆面なしの声自慢」であった。毎朝、大阪朝日新聞が配達されると、新聞の小説を祖父母や母の前で、声を張り上げて読んでいたという。それが幼き下村の「日課」であった。

和歌山県立中学二年の時、明治一九（一八八六）年、一家は東京で通信省官僚として独り暮らしをしていた父を追って上京した。宏は神

田駿河台の成立学舎へ通った。

父・房次郎は明治二三（一八九〇）年、雑誌『交通』を発刊した。この年に宏は第一高等中学校に入学し、父の編集を手伝い始めた。彼は「僕などが發送先の宛所、宛名を筆書きする、帯封にする、切手を貼りつける、小さい荷車に積み込んで麹町局へゴロゴロと引き入れた」と回想している。また、この頃から大学時代まで「ほとんど一手で和歌山学生会雑誌の編輯をつづけた」と証言している。これらの経験は、マスメディアと下村の関わりとしてとらえることができよう。

学校での成績は「いつも中頃であった」という。この頃からスポーツを始め、旅行もするようになった。大きな影響を受けた本として、後の下村はこう語っている。

矢張り青年時代に読みし本が感銘を深くうけてゐます。

中学時代―日本外史

高校時代―史記列伝

読書やスポーツ、旅行など、この頃の経験が後の下村の基礎をつくつたようである。

大学時代の下村は活発で、いわゆる「蛮カラ」であった。授業にはあまり出席せず、「自分達の勉強しないのを豪傑気取りに得意がった」としている。それでも下村の学業成績は「各学期試験を通じて一番をつづけ出した」ほどであり、卒業して文官高等試験を受けた時、全国で三番であったという。

この時期からの友人として、下村は後に栗本鉄工所を創業する栗本勇之助について言及している。栗本とは同じ明治八（一八七五）年生まれで、同じ和歌山県出身であった。当時は吉原へ繰り出す学生のグループがいくつもあり、「かくいう海南は栗本派の門下生」であったと言っている。

明治三一（一八九八）年、卒業に際し、下村は成績優秀であったため「特待生組」となり、大蔵大臣秘書官の早川千吉郎から大蔵省への誘いがあった。⁽²¹⁾しかし「和田垣（謙三）先生から、通信省から君をすぐ洋行さすから、という事だがどうだ」と言われ、洋行が約束されない大蔵省を蹴って通信省入りを決めたという。下村は「一にも二にも洋行したかった」のでこの道を選んだ。

②通信省での下村

大正四（一九一五）年に、四〇歳で台湾に赴くまで、下村は通信省官僚として活躍した。この仕事を通じ、下村には「自己の体験よりにじみ出た主張」があった。それは道州制の提唱であり、当時の下村の言葉で言えば、「府縣ブロック」の主張である。通信省で電気監督の仕事に携っていた時、電力や電車に関する業務が数県にまたがっているため、何度もなく都合を感じたという。下村は次のように主張している。

電力会社、電鉄会社などが各府縣にまたがるために費やす手数と金と時間は夥しいものである。宇治川電力はあの短い間に滋賀、

京都、大阪と二府一縣にまたがっている。ために工事の許可申請、模様替、検査などの手続に三倍の手数を要するだけでない。時には官署間のニラミ合ひで際限なく引きのばされる。それだけコストが高くなるばかりである。⁽²⁶⁾

さらに続けて交通の発達に伴って住んでいる県と働いている県が異なる場合が増え、所得税などの賦課徴収の上から見ても「かなりの不公平不均等」があると述べている。情報や交通の発達に伴って行政区分が大きくなって行くことは「不変の天則」だと考えていた。

明治三四（一九〇一）年、下村は北京へ向った。前年まで、いわゆる「義和団の乱」で、北京は騒然としていた。乱の鎮圧後、北京には新たに郵便局が設けられ、下村が初代の局長として赴くこととなった。⁽²⁸⁾

乱の直後の北京の様子を、下村は「荒廢の二字を以てつきて居る」と表現している。この時、清朝の外交を処理していたのは李鴻章であり、下村は単独会見を申し込んで承諾を得た。彼は「黄口二十七歳の若造が七十九歳の宰相に安々接見ができる。誠やそこに戦敗国の悲哀がある」と述べ、「戦はめつたにやるものでない、敗けたときはやり切れぬ」と書き残している。この時以降、下村は反戦論者になったと考えてよいであろう。赴任から一年後に帰国し、その後すぐに、ベルギーへ留学することとなった。

③ベルギー留学と簡易保険創設

すぐに洋行させてくれるという約束で下村は通信省に入ったのだ

が、第一次大隈内閣は四ヶ月で瓦解したため、洋行は立ち消えとなった。北京勤務の後、明治三五（一九〇二）年の秋、ようやく下村は郵便為替貯金事業研究のための「留学」³²としてベルギーへ出発した。

帰国の後、明治三八（一九〇五）年十一月、下村は東京帝国大学の講堂で、ベルギーの貯金局や労働者の保険、住宅などについて講演する機会が与えられた。これをきっかけに下村は簡易保険に詳しいということが広く知られるようになり、時の内務大臣・平田東助に会うこととなった。平田は下村に「日本で今簡易保険につきソウソウ研究した人は無い」³³と述べ、下村を中心に創設準備を進めるように言った。農商務省や大蔵省との折衝、民間の保険会社との討議を経て、大正四（一九一五）年、簡易保険は成立する運びとなった。

④台湾総督府

大正四（一九一五）年一〇月、下村は台湾総督府民政長官の職を拝命する。当時は「人生五十としてこれが御奉公納め最後の活動であらう」³⁵と考えていた。その後、下村の尽力によって台湾は「教育に衛生に殖産に交通に」³⁶大いに発展したという。

台湾時代から下村は「海南」という号を使い出した。号については、「小にしては紀州、中にしては台湾、大にしては南洋といふ意味」³⁷と説明している。

大正八（一九一九）年、下村は母校の東京帝国大学より法学博士の学位を受けた。論文博士ではなく、総長推薦であった。³⁸

大正一〇（一九二二）年七月一日、四六歳の下村は、官僚生活に

終止符を打った。辞職の理由については「もう役人といふ職に飽き飽きした」³⁹と述べている。

⑤朝日新聞入社

この頃、朝日新聞社長の村上龍平は下村に目をつけていた。大阪朝日新聞に対し、東京朝日新聞の業績が芳しくない⁴⁰ので、東京を任せるに価する人物を探していたのである。入社後の下村は、以後一年に数冊のペースで精力的に本を執筆するようになる。

新聞社の経営者となった下村は、六甲山麓の苦楽園に居を構え、「海南荘」と名付けた。当時の住所は「兵庫県武庫郡大社村字苦楽園」⁴¹であった。新聞社勤務時代の下村が、プライベートに関して最も多く記述していることは、この海南荘に関するものである。後には東京の田園調布へ転居するが、当初は海南荘を「永住の地」⁴²と決めていた。

⑥ラジオ放送と下村

大正一四（一九二五）年三月一日、東京放送局は、「試験送信」の名目で放送を開始した。後の昭和七（一九三二）年二月にラジオ受信契約者が一〇〇万人を突破した際、下村は次のように書いている。

大阪朝日楼上に於てラヂオのテスト放送をなし、内地より更に朝鮮台湾樺太に最初の放送を試みた僕、芝浦の仮放送局で始めのテスト放送を試みた僕は、百万突破の現状より当時を想到して、其進境の上に隔世の嘆あるを思はしめる。⁴³

別なところでも朝日新聞楼上からの実験放送について言及し、自身について「恐らくは放送をした最初の一人」と述べている。芝浦からの最初の放送演説は、「新聞の弁」だったと思われる。さらに高柳健次郎によってテレビジョンの実験が成功すると、これも将来的には各家庭に普及するであろうと積極的に啓蒙していた。

その後もラジオ演説を行なうため「幾百度」とマイクの前に立った。日本放送協会に長く勤務していた矢部謙次郎は、高嶋米峰、永田青嵐と共に、ラジオ演説の「稀れな名手」として下村の名をあげている。ラジオ演説でカリスマ的人気を誇った友松圓諦も、代表的なラジオ演説家として、高嶋、永田、加藤咄堂と下村をあげている。

下村は「毎元旦のラヂオ」に出演していた。本人は正月の出演を「恒例」と言っている。多くの放送に出演していたこともあって、下村は有名人であった。昭和初期において、最も有名な知識人の一人だったと思われる。下村は「地方を巡遊するとき、ラヂオでお馴染になつてゐる」とか、「内地であれば僕の名を誌上に知り、その声をラヂオに覚えるから、壇上に立てば一見旧知の如く」と言っている。

⑦朝日新聞退社

昭和一一（一九三六）年、二・二六事件が起きた。三月五日には広田弘毅が首相と決まり、六日に下村へ大臣就任の打診があった。下村は入閣の際の持論として、「大選挙区比例代表、六大都市市制改正、及び府県合同の意見書」を提出した。朝日新聞は、誕生日である三月

一二日をもって退職することにした。

しかし、下村の入閣に対して、軍部による抗議があったらしい。入閣は見送られ、下村は浪人になった。『朝日新聞社史』は、陸軍が下村を「自由主義者」と見なして入閣反対運動をしたと記している。

また退職に伴って、「どうしてもさぐさの雑用なり耳学問なり古き友の語らひなり、東京の方に足が繁くなるばかり」となり、東西両方に家を持つのは金銭的に苦しかった。下村は六甲山麓・苦楽園にあった「千五百坪」の海南荘から、田園調布にある「三百三十坪」の朝風荘へ転居した。家財類の大半は海南荘に残し、海南荘は帽子商の堀拔義太郎がそのまま買い取ることとなった。飯島幡司が記念として海南荘に歌碑を建立し、碑には下村の歌がぎざまれた。

⑧貴族院議員として

下村は昭和一二（一九三七）年一月、貴族院議員になった。しかし後の下村は昭和一一（一九三六）年の辞職から昭和一八（一九四三）年に日本放送協会会長に就任するまで「一介の野人としての私に七年の歳月が流れた」と書いている。この間は定職に就いているという自覚がなかったらしい。

日中戦争の勃発について、下村は「戦争はもとより不祥な事である」と書いた。やがて日米戦の可能性が出てくると、「日米間の戦争——これほど無意味な馬鹿気たものは無い」と主張した。もつともこれは日本の軍部に対する批判だけではなく、アメリカの「身勝手な」外交政策に対する批判も含んでいる。本格的な世界大戦になれば、「世界

文化の破壊戦」になるだろうと考えていた。

⑨大日本体育協会会長

昭和一五（一九四〇）年当時、「欧米ではスポーツは老幼男女共通の大きな魅力であるが、日本ではまだまだ一部少数の若い人達の心をとらへてるにすぎない」という状況だった。テレビジョンが出現する以前、一般の民衆によるスポーツへの関心は現在よりもはるかに低かったようである。

昭和一二（一九三七）年一月二九日、下村は大日本体育協会会長の職を受けることになった。⁶⁵来る昭和一五（一九四〇）年に東京オリンピックが開催されることはすでに決まっており、組織委員会も立ち上げられていた。東京オリンピック組織委員会は、会長を徳川家達公爵が務め、副会長を東京市長と大日本体育協会会長が務めることになっていた。⁶⁶もし開催されれば、下村は責任者として重要な役割を果たす予定だったのである。しかし日中戦争の勃発により、昭和一三（一九三八）年七月一六日、東京オリンピック返上が決定となった。⁶⁷この時の心情について下村は「残念である。無念である。遺憾である」と書き残している。

⑩日本放送協会会長

太平洋戦争が開始され、緒戦の成功に国民が酔いしれると、反戦論者であった下村は影が薄くなった。しかし次第に戦局が厳しくなってくると、日本放送協会は昭和一八（一九四三）年五月一五日に新役員

を選出し、新会長として下村を迎えた。下村は、就任早々、「昭和九年以来の大異動」と言われるほどの改革を行なっている。

放送協会の会長になった下村は、情報の正確な提供と、天皇のラジオ出演を考えた。前者は「屢々当局に真相発表につき迫ったが遂に認められなかった」と述べている。⁷⁰「当局」とは、内閣情報局のことと思われる。

天皇のラジオ出演については、「帝国議会開院式に給はる勅語の玉音をマイクを通じ国民全般へと念じたが、頭から問題にされなかった」と証言している。大宅壮一は「昭和十五年、昭和十八年と二度も天皇の『開戦詔書』放送を放送局が願いでたことがあったが許されなかった」と書いている。⁷²昭和一八（一九四三）年の願い出は、下村によるものと考えてよいであろう。

放送協会会長としての仕事は、終戦内閣への参加によって、二年足らずで幕を閉じた。

⑪終戦内閣への参加

昭和二〇（一九四五）年四月五日、鈴木貫太郎が首相に就任した。鈴木は七日、下村へ直々に電話をかけて入閣を打診した。⁷³下村は國務大臣と内閣情報局総裁の就任を求められた。日中戦争初期からの早期終戦論者であった下村は、ついに情報機関のトップに登り詰めることとなった。

内閣情報局とは、内閣情報部が昭和一五（一九四〇）年二月六日にその機構を拡充して設けられた組織である。太平洋戦争初期には、

陸海軍の情報部との連絡も不十分であったが、下村は就任早々、情報宣伝活動の機能を情報局へ一元化することに成功した⁽⁷⁶⁾。この一元化の名目は、戦争遂行のためだったと思われるが、最終的にこれは終戦の際に効果を發揮したと考えられる。

⑫二時間の天皇謁見

入閣した下村は、終戦に向けて「多少運動して見た⁽⁷⁶⁾」という。玉音放送実現のため、「七月下旬」に天皇謁見を打診し、八月八日に可能となった。当日一三時三〇分「卓をへだつる事六尺に足らず、おさしづのまま椅子に腰を下ろし⁽⁷⁸⁾」、天皇へ言上したという。言上した内容は「情報の一元化」「空襲下の放送」「時局に対する民心の動向」「信賞必罰の要」「宮廷と重臣」「国体明徴と君臣の親和」「大本営移転」「大号令」「鈴木内閣の使命⁽⁷⁹⁾」であった。

これらは内容がほぼ一つにつながっている。空襲が激しくなることによって「民心⁽⁸⁰⁾」が乱れてきたので、「対策の見るべきなき軍当局の責任」を問い、「必罰⁽⁸⁰⁾」を行なうべきだと訴えた。その上で「宮廷と重臣」、「君臣」が和するよう「大本営移転」を中止し、東京から「大号令」すなわち玉音放送を行なうべきであると進言したのである。玉音放送は、必ずしもいきなり終戦に持ち込むのが狙いではなかった。終戦は下村の悲願であったが、まずは「民心」の安定化が当面の目的だったのである。その上で「鈴木内閣の使命」は、最終的に「時局收拾⁽⁸¹⁾」であると進言した。これは終戦を暗に示していたと解釈できる⁽⁸²⁾。

一時間の言上が終わったので下村が席を立とうとすると、昭和天皇

は下問し、さらに一時間さまざまな会話が交わされた。最後に昭和天皇は「いろいろ参考になった⁽⁸³⁾」と述べた。

⑬御聖断と八・一五事件

八月九日二三時五〇分、御前会議が開かれた⁽⁸⁴⁾。御前会議とは、下村によれば、一種の儀式であり、列席者はあらかじめ発言の内容を決め、筋書通りに甲論乙駁し、最後は予定通りに意見の一致を見て終わる。その間天皇は意見があっても発言しないものであった。しかしこの日の御前会議は、意見の一致も見ないまま、各自が自分の意見を自由に発言した会議であった。

日付が変わって一〇日午前二時過ぎ、結論が出ないまま鈴木首相は昭和天皇の意見を聞くという前代未聞の挙に出た。昭和天皇は「それは自分が意見をいふが自分は外務大臣の意見に賛成する⁽⁸⁵⁾」と言った。ポツダム宣言受諾の「御聖断⁽⁸⁶⁾」である。下村は、これを形式上「御聖断」ではなく「思召⁽⁸⁶⁾」を拝するというものにして、この日の会議は閉じられたと書いている。

スイスやスウェーデンなど中立国を通じて、ポツダム宣言受諾が通告された。連合国側からの回答を受け、一四日朝、一〇時半に平服のまままでよいから参内せよと命令があった。最後の御前会議である。昭和天皇は「御詔⁽⁸⁷⁾」、つまり再度終戦の「御聖断」を下した。昭和天皇は「国民に呼びかけることが良ければ私は私は何時でも『マイク』の前にも立つ⁽⁸⁸⁾」と言った。終戦と玉音放送が一度に決定することとなった。下村にしてみれば、二段階になっても良いものが、一つのものとして

進行することになったのである。一四日の午後、再度閣議が開かれ、玉音放送に関して「あとは臨機下村に一任⁽⁸⁶⁾」と決定した。

一四日二三時二〇分頃、宮内省二階で昭和天皇の声をレコードに録音する作業が行なわれた。録音に先立ち、天皇は下村に「声はどの程度でよろしいのか」と聞いた。一度目の録音が終わると、「天皇も自分から下村総裁へ向い、いまのは声が低く、うまくいかなかったようだから、もう一度読むと聞いた⁽⁸⁷⁾」とされている。天皇は録音に際して、終始下村を頼りにしていたようである。

録音が終わった深夜、車で帰宅途中の下村は反乱軍に捕らえられた。いわゆる「八・一五事件」である。終戦を阻止しようという一部軍人によるクーデターであった。下村は二重橋内の近衛屯所で、スタッフと共に一夜監禁されることとなった。

クーデターは第一に「宮城占領による徹底抗戦」が目的であり、第二に宮内省で一晚保管されていた「録音盤奪取」を意図したものであった。下村は監禁された部屋の中で、反乱軍に見られたくない書類を処分するため、鼻をかむ振りをし、それらを懐に入れた⁽⁸⁸⁾。用便のためとしてトイレに行き、小さく破って便器に流した⁽⁸⁹⁾。

事件を知った田中静彦・東部軍司令官は現場に駆けつけ、朝には反乱軍を解散させた。反乱軍は特に武力によって抵抗することもなく、玉音盤もついに見つけることはできなかった。

⑭玉音放送

クーデター軍による監禁から解放された下村は、朝に情報局を訪れ、

次いで首相官邸を訪ねて官邸へ引き上げた⁽⁹⁰⁾。しかしほとんど休む間もなく、正午前には放送会館に入っている。万が一分が倒れた時は大橋八郎・日本放送協会会長に代役を頼むこととした。

ラジオは前夜とこの日の朝、重大放送があると繰り返し予告していた。正午の放送は時報に続き、和田信賢アナウンサーが「ただ今より重大なる放送があります。全国聴取者の皆様、ご起立をねがいます」と述べた。続いて下村がマイクの前に立った。

天皇陛下におかせられましては、全国民に対し、かしこくもおん自ら大詔を宣らせ給うことになりました。これよりつつしみて玉音をお送り申します⁽⁹¹⁾。

ほとんどの人がはじめて聞く昭和天皇の声を紹介したのは、多くの国民がその声を知る下村であった。続いて君が代が流され、前日録音した昭和天皇の声が放送された。その時のスタッフの様子を下村は「満室声のみ涙に光っている⁽⁹²⁾」と書き残している。昭和天皇の大詔が終わると再び君が代が流され、下村が述べた。

つつしみて天皇陛下の玉音の放送を終わります⁽⁹³⁾。

『日本放送史』（一九六五年）は、下村の紹介から始まって下村の最後の締めくくりの言葉までを「玉音放送」としている⁽⁹⁴⁾。「玉音放送」の出演者は、昭和天皇と下村の二人であった。

放送後、下村は「二重橋前は大変な人ですよ」と聞いた。下村はわざわざ「車を宮城前に走らせて」、その光景を見に行った。立ったまま黙祷をささげる人、砂利に頭をふせている人、君が代を歌う人、天皇陛下万歳と叫ぶ人などがいた。

下村は連合国との停戦協定が一通り済んでから内閣は解散すべきと考えていた。しかし、放送が終わったその日のうちに閣議が開かれ、一五日一六時半、鈴木内閣は解散となった。下村は解散を予期しておらず、「不意討」だったと書いている。玉音放送の後、さらに終戦に向けた放送がいくつも必要だと考えていたようである。

次の日、下村は皇居前に「いや増せる群衆のつながり」を見た。この光景こそ写真に撮っておくべきだと考えたが、当時の規則や因習によって撮影は許可されなかったとのことである。下村が電車に乗ると、見知らぬ人たちが下村に向かって目礼や脱帽をしたという。

鈴木の後を受けた東久邇稔彦・首相は、終戦の徹底を訴える放送を行ない、その録音は繰り返し流された。九月二日、ミズーリ艦上で降伏の調印がなされ、形式的にはここで日本の戦争は終わった。下村はそのしばらく後まで、残党が進駐軍に対してゲリラ戦を開始しないか心配し続けたと述べている。

II 松下幸之助との交流

① 昭和九年の出会いとその後

昭和九（一九三四）年九月一七日、五九歳の下村は門真の松下電器

を訪問した。訪問した理由は「同郷の出身といふので」とだけ簡単に記している。取材をしたのは「わづかな時間」であったが、一度会っただけのこの三九歳の実業家を下村は高く評価している。下村は『初しぐれ』というメディアで、三回にわたって幸之助の紹介記事を書き、その後自らの著書『プリズム』に記事を再録した。

多くの人物の紹介記事を書いている下村であるが、基本的に故人が多く、しかも一度会っただけの人を三回にわたって紹介することは珍しい。この幸之助の記事は、下村の中でも特異な部類に入ると言える。最初の記事で下村は幸之助の経歴を簡単に紹介した後、幸之助の経営手法を次のように紹介している。

松下君は原価開放主義で販売店に取引したといふ。原価一円のものを一円三十銭かかったと号して、一円五十銭に売ってくれといはない。一円の原価は一円とそのままふちあけて五十銭儲けさせてくれ、しかし今追っかけて改良拡張に金がいるから我慢してくれ、そのうちに必らずよりよいものをより安く、値を下げてオロスからといふのである。…おもしろい一風変わったやり口のやうで、実は当然すぎた事であるが、さりとてこんな事が誰もがやっていけるものでない。そこに松下君その人の個性の光りがあるからである。いかにもおもしろい話だとうなづかれた。

当時、朝日新聞副社長であった下村は、経営者としてその手法を「おもしろい」と思ったようである。二回目の紹介記事では、松下電

器が如何に多くの製品を作っているか、具体的に紹介している。第一に配線器具、第二に乾電池、第三にランプ、第四にアイロンやこたつ、第五にラジオ、そして第六の合成樹脂として、「製品は茶托、湯呑、灰皿、煙草入、各種の盆御膳、御椀、菓子器、盃洗、盃、弁当箱、木皿、豆皿、銚子、はかま、小鉢、ペン皿、肉池等々」と書いている。幸之助は『私の行き方考え方』で合成樹脂界へ進出したことを書き、「幾多の応用器具がその後続々と生まれ」と述べているが、どのような製品が作られたのかは明記していない。松下電器がこの当時「灰皿」や「弁当箱」まで作っていたという下村の証言は貴重である。

三回目の記事である『初しぐれ』の「十一月号」で、下村は幸之助の言葉をそのまま引用している。

宣伝の大事なるはよく知っています。だから広告に金はおしませぬ。しかし肝心の製品が時代おくれになつては何んにもなりません。十年一日の如くといふ詞ことばは工場にはあてはまりません。いつも研究試験をつづけ改良に不断の努力を必要とします。だから広告費と同じく研究費を使つてゐます。

この『初しぐれ』という媒体が、当時の程度流布していたものは不明である。しかし、この記事を再録した単行本『プリズム』は東京市神田区四条書房の発行となつている。朝日新聞副社長で、当時すでにラジオ演説の名手としても著名であつた下村の知名度を考えると、部数は不明であるが基本的にこの単行本は全国へ流布したと考

られる。

この記事は、第一に全国的な知名度を持つジャーナリストによる紹介であり、第二に幸之助の経営理念に注目している。筆者によるこれまでの調査で、この記事は以上の二つの条件を満たす最も古い例である。今後の調査でさらに古い事例が見つかる可能性は否定できないが、下村自身は先行する記事があつたとは述べておらず、同郷の出身者という独自のルートで幸之助にたどり着いたと明言している。この意味では、下村は幸之助の経営理念を「発掘」したジャーナリストであると言えるかも知れない。

この時以降、両者には交流が生まれた。今日、国立国会図書館憲政資料室の「下村宏文書」に幸之助が書いた下村宛の手紙が残っている。全文は次の通りである。

下村宏様

松下幸之助

拝啓 暑気次第に相加はり申候處

彌御健勝に被為涉候段大慶此事と奉存上候

平素は兎角御無音に打遇申譯も無之平に御容赦の程願上候

昨日は又御著作の書籍態々御惠贈に預り難有受納仕候

店務の間拝読致し度と相樂しみ居申候

右乍略儀不取敢御禮申上度寸書如斯御座候

草々

昭和十一年七月十四日

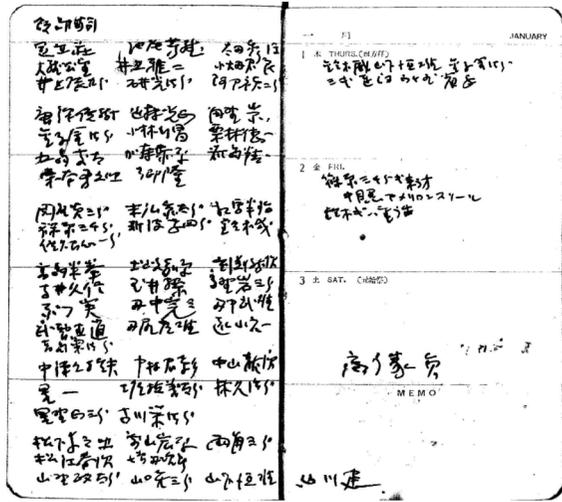


写真4：下村宏文書「昭和17年手帳」（国立国会図書館憲政資料室所蔵）〔一番左側、下から三番目に下村の字で「松下幸之助」と記してある〕

下村は幸之助に本を贈ったようであり、これはそのお礼状と思われる。便箋や封筒は松下電器のもので、手紙は活字で印刷してあり、封筒の宛名書きは手書きである。宛名書きは誰かが代筆したものとと思われる。下村は戦災でかなりの資料を失っている、これは残存した貴重なものである。

この時下村が贈った本は明記されていないが、二つ候補があげられる。一つはこの手紙の直前、昭和一一（一九三六）年六月二十九日発行の『これからの日本 これからの世界』¹⁵である。これは下村が書いた

ほとんど唯一の子供向けの書であり、難しい漢字にはルビが振ってある。内容は当時の社会について紹介した教科書のようなものである。小学校中退の幸之助に配慮して、あるいはこうした本を贈ったのかも知れない。もう一つはやはり幸之助について書かれた文章が掲載されていた『プリズム』ではないか。『プリズム』は昭和一〇（一九三五）年一月一八日発行となっている。しかしこの場合、本の発行から幸之助の手紙まで半年以上が経過していることになる。

また、同じく国立国会図書館憲政資料室に所蔵されている下村の「昭和17年手帳」（写真4）には、下村の字で幸之助の名が書かれている。どのような意図で書かれたものかは不明であるが、当時における両者の交流をうかがわせる資料である。

②下村と幸之助をつなぐもの

ナショナル証券の顧問などを務めた松永定一は、次のように述べている。

松下幸之助氏には昭和一二年、私が大株一般取引員だったときに初めてお目にかかった。当時「木友会」という紀州出身者のつどいがあった。現大阪財界の長老、栗本順三氏（栗本鉄工所特別顧問）の岳父、栗本勇之助氏（同社創業者）らが中心になっていたが「もそつと若手の会員を」とのことで、松下氏、田村堅三氏（元日本弁護士連合会副会長）、小山市三氏（大日金属工業会長）と私とが入会したものだ。

松下氏はこのとき確か四三歳、松下電産の資本金もすでに一〇〇万円、従業員数は五〇〇〇人を数え、日本の代表的電気機器メーカーとして業界に君臨していた。¹⁵⁾

この木友会は、戦後になると幸之助を中心に「音無会」として再生されたと松永は説明している。

木友会の中心は、栗本勇之助であった。すでに述べたように、この栗本と下村は東京帝国大学時代からの親友であり、栗本は下村のことを「君は私の益友、私は君の悪友」と言っていた。栗本にゴルフや和歌を勧めたのも下村であった。また別のところで下村は学生時代、「東京にて和歌山学生会を起すと私は彼（栗本）と二人でその雑誌の起草編集をつづけた」としている。¹⁶⁾

幸之助が木友会に入った昭和一二（一九三七）年、下村はすでに朝日新聞を辞職し、住居を東京に移しつつあった。しかし大阪を去る直前、昭和一一（一九三六）年に「私の大阪への執着は転居位でぬけきれませぬ。たとへ東京へ転居しましても、月に一度か二度、何かの用事をつくつてもらふ、紐をつけてもらって大阪へくる」と言っていた。¹⁷⁾以前から「東京大阪間は梭の如く往復してる」状態だったので、転居後も頻繁に往復していたものと思われる。例えば、昭和一五（一九四〇）年には大阪で「海南会」があったと書いており、昭和一六（一九四一）年四月には京都の「和歌山県人会」を訪問している。¹⁸⁾以前から下村は「社交倶楽部」の重要性を方々で訴えており、自らもそうした会を頻繁に訪れていた。昭和一四（一九三九）年には次のよう

に書いている。

僕の年末のあいさつ状は約一万通に及ぶ。浪人になって大分その数を整理したが、絶えず旅行もし講演に廻はる、くさぐさの委員会などに顔を出す、つい尻から尻から新規の友人が増すばかりである。¹⁹⁾

先の手紙や手帳などから考えると、この「新規の友人」の中に幸之助も入っていたはずである。下村が幸之助に徒手体操を教えたのも、この前後であったと推測される。

③下村はなぜ幸之助に目をつけたのか

大正三（一九一四）年一月、下村は『南紀人材論』という本を出版している。この書の出発点は、和歌山県が「古来より現時に至る迄尤も人材に乏しき国の一である」という認識であった。下村によれば、和歌山は気候が温暖なので、外から和歌山を訪れる人は「活動せんよりは休息せんために」やってくるという。和歌山は東海道などの「大動脈」から外れており、仮に和歌山県に用事があっても「その入口に和歌山市といふ大家さん」が控えているので、そこで用事を済ませることができ、それ以上奥には入らない。「良湾」や「良港」にも乏しく、航海の拠点としても魅力が薄い。そのため、和歌山県民は外から受ける刺激が少なく、立身出世を考えない傾向にあると論じている。下村は今後「十五年間位」は、和歌山から有望な人材が出てこないで

あろうと悲観的な見解を述べていた。この書から約二〇年後に下村は、幸之助を「発掘」することになる。

また、下村は教育問題にも関心があり、「日本の教育は画一の弊に陥り規則づくめである」とか、「帝国大学といふやうな温室¹³⁷？を出た連中は、机上の理窟は達者だが、借金の證文に判一つ押せといつてもビクビクものである」と論じていた。特に実学の面から「我邦の学校教育は長すぎる、その弊あまり御役に立たない仕掛になつてゐる」とか、「学校で修業して悪いといふ事は無いが、学校で修学しなくとも偉材は輩出される」と述べていた。さらに「自動車のヘッドライトの廻転装置と方向指示機を発明した羽田正勝君」「自動織機附属の自動測尺機を発明した岡本富三君」など、小学校卒や中学校中退でありながら発明によつて「世の中に少からぬ貢献」をした人々を積極的に紹介することもあった。¹³⁸ 下村は朝日新聞退社と共に苦楽園の海南荘を帽子商の堀拔義太郎に売り渡したが、この堀拔は「教育は一つもない」が商人としては「驚異の成功者」であった。¹³⁹ 堀拔のことを詳しく紹介して、「学校教育を受けない労働者が、よく経営者となつて財を積み得るといふ実證を示す」としている。下村は、幸之助のような経歴を持った人に強い共感を持っていたのである。

さらに官僚時代の電気業務の経験からか、昭和一〇（一九三五）年当時、もはや「電気万能時代」¹⁴⁰ になつたと認識していた。電気そのものにも、下村は関心を持っていた。

和歌山県出身者で、学校へほとんど行かずに成功した人物、さらに電気に関心があったのならば、幸之助こそまさに探していた人材だっ

たと言えるのではないか。

Ⅲ 下村の政策提言とその思想

下村によるいくつかの政策提言は、幸之助に影響を与えたと思われる。ここでは、そのうち道州制の提唱、觀光立国、物価論や貯蓄の重視の三点について取りあげる。これらの思想は、下村にとつて生涯最も重要な仕事であつた玉音放送と根底においてつながるものがあつたようである。本来であれば、幸之助との一致点や相違点についても比較検討したいところであるが、それは次稿の課題とし、ここでは下村の主張がどのような認識に立脚しているのかを明らかにしたい。

① いくつかの政策提言

議員としての下村が最も心血を注いだことは、やはり道州制の断行であつた。その活動について、次のように要約している。

府県制合同問題は私の数十の冊子に何時も筆にされてゐる。近衛、東条、小磯内閣を通じ貴族院の演説にも口にしてある。又東条、小磯両首相に一回づつ首相官邸に於て面会したが、いづれも主として道州制の決行を促がしたのであつた。¹⁴¹

すでに述べたように、下村は官僚時代の経験から道州制の必要を認識し始めた。情報や交通の発達に伴つて行政区分が大きくなって行く

ことは「不変の天則」だと述べていた。近代文明における情報や交通は、あたかも自然現象のように発展して行くのであり、それに合わせて行政区分や政策も常に変えて行かなければならないという発想である。

また道州制の導入は、国民の精神面に及ぼす影響もあると考えていた。下村は次のようにも述べている。

府県の廃合はそれは簡単な物質的財政的の節約とか利便とかいふ外に、区画の拡大に伴ひ、狭い地方的差別観念を拡大し撤廃するといふ、大国民としての品性陶冶の上に及ぼす効果が考へられねばならぬ。⁽¹³⁾

交通や情報の発達はより大きな行政区分を必要とするが、大きな行政区分は民心に好影響を及ぼすと主張している。市町村合併についても議員になる前から頻繁に主張していたが、これはそれなりに成果をあげてきたと解釈していた。⁽¹⁴⁾

交通の発展は、必然的に観光の機会も増やすものである。下村自身の観光の経験は、非常に豊富であった。海外ではまずベルギー留学へ向う際に、観光を兼ねてシベリア鉄道でヨーロッパに向っている。ベルギー国内では各都市に日帰り旅行をし、多くの郷土博物館を見て回った。⁽¹⁵⁾ 夏にはアルプスへ一月ばかり旅行したと言っている。ベルギーへの留学も一年の予定であったが、さらに半年の延長を申し出て、ドイツで二ヶ月、残りをフランス、イギリスで過ごし、アメリカを経

由して帰国している。⁽¹⁶⁾

朝日新聞に入社した直後、下村は再度欧米を長期にわたって訪問している。元々は官僚を辞めて私費で欧米を訪問するつもりであったが、朝日新聞社長の村上龍平は、入社して朝日新聞の仕事として欧米を訪問してはどうかという話を持ちかけたのである。これに応じて欧米行きとなった下村は、大正一〇（一九二二）年九月二一日横浜を出発し、翌年四月七日神戸に帰ってきた。⁽¹⁷⁾ 欧米各国で見聞を広めた様子を『欧米より故国を』にまとめている。

国内は佐渡島（昭和五（一九三〇）年）や隠岐（昭和六（一九三二）年）などの離島も比較的早い段階で訪問しており、昭和七（一九三二）年の時点で「日本六十六箇国、足跡未だ至らざる国が、日高と対馬と壱岐とこの能登であった」と書いていた。昭和一三（一九三八）年には「対馬と壱岐だけが残されている」としていた。もちろん、当時日本領であった朝鮮や台湾などはこの時点ですでに訪問している。昭和一四（一九三九）年、新京で開かれた日満華競技大会を訪問した帰りに対馬と壱岐を訪問して、ついに全国踏破が完成した。下村はこれを「積年の宿願」と述べている。⁽¹⁸⁾

旅について下村は「由来旅は見聞を広めるといふ事に重点を置く」と述べている。例えば、下村は同じ朝日新聞に勤務していた飯島轡司と一緒に、昭和九（一九三四）年三月一九日から四月一〇日まで、四国と和歌山を巡る旅に出た。⁽¹⁹⁾ この時の様子を飯島は次のように証言している。

毎日八時の朝立を急いで、見物、宴会、講演、揮毫、紀行と夜の一時二時まで力一ぱいに立廻り、会へる限りの人に接し、見られる限りの物を訪ね、聞ける限りの事を問ひ、旋風のやうな匆忙のうち、思ひ切り身心を押し広げて、魂の虫干をしたのであった。帰ったときには熱い湯から上ったやうな和やかな気持ちになつてゐた。

これが海南式だなど気がついて、私は心ひそかにこの心境を下村博士に感謝したのであった。

こうした豊富な観光の経験は、国策としての観光立国の発案へと発展した。例えば、「観光道路への期待」と題して、観光に向けた京阪神や東京周辺の道路の整備について具体的に論じている。また、「東洋における観光事業の振はざるは、主として国際間の連絡協調が欠けてゐるからである」と述べていた。

物価の問題は朝日新聞時代から議論しており、「まづ生産費の低下、市価の引き下といふ根底から財政及経済の建直しに朝野共に目覚めねばならぬ」と主張していた。貴族院議員になつてからは「中央物価委員会」や、その下部組織なのか「食料品の専門委員会」にも関与していた。

物価はそれ自体が一つの情報であるが、下村はこの情報に冷静に正しく対処すべきであると考えていた。下村によれば、交通の発達は、広範囲の商取引を可能にするが、広範囲の取引は無用の混乱を増やすことにもなるという。無用の混乱は悪性のインフレをもたらし、それ

に対して人々が慌てて消費すると、さらに物価が上がって闇市が盛んになる。闇市の存在は、ますます物価を上げる要因になる。物価という情報に正しく対処するには、慌てて消費しないように、「国民の心構へ」を直さなければならぬとしたのである。それが貯蓄の奨励であった。

日中戦争勃発によって「悪性インフレ」が懸念されるようになると、下村は積極的に貯蓄を推奨した。貯蓄は余計なものを買わないことで「表」から物価を下げ、その分だけ公債を消化することで利子を下げ、「裏」からも物価を下げると考えた。下村は次のように主張している。

我々の心構へ一つ、覚悟一つで、貯金などもさうさう犠牲ぶらなくとも、気安に出来る。しかもそれが国のためになる。物価の騰貴を防ぐ。貯蓄ができる。更に過度の酒や煙草など止められたら寿命も延びる。一挙四得五得ともなうといふものである。

また、下村は鉄道広軌論もしばしば主張していた。これも広軌鉄道にすることによって、一車両当たりの人や物の移動が低コストでできるようになり、物価を下げると考えたからである。下村は「私は鉄道の広軌論者である。それは国家の運送力を大にして、延いて生産費を引下げることが、日本の産業方針として最も有効であるからである」と主張していた。

②玉音放送の思想

下村が生涯において行なった仕事のうち、最も重要な仕事は玉音放送であった。緊迫した状況において命がけで成し遂げたこの仕事は、やはり下村の思想のうち、根本的な要素が潜んでいる。

まず、下村は当時の日本の聴取者が、欧米とは異なる状況でラジオを聞いていたと指摘している。例えば、下村は昭和二三（一九三八）年に次のように書いている。

（日本でラジオ受信機は）都会地ではかなりよく行き渡つてゐる。往來では軒並にラヂオの放送を聞かされてゆく事が珍しくない。

ところが外国ではどうかといふと、時と所により番組によりそれぞれ好き好きがある。何よりもやかましいうるさい、邪魔になるといふので聞きたくない時も少なくない。だから家屋の構造も日本のやうに明け放しでないが、しかも西洋ではいづれの家もラヂオはなるべく低音にして、隣家又隣室へ迷わくをかけないやうに注意してゐる。

なによりも往來の店先でラヂオを据ゑつけて聞かしてるといふやうな例は少ない。ドイツなどでは警察で全然禁止されてゐる。⁽⁸⁾

当時の日本のラジオ受信機普及率は、下村によれば世界で一五番目であり、決して普及が早い方ではなかった。しかし日本家屋の構造と、外へ音を漏らしても平気な風潮により、往來でもラジオ放送を聞くことができた。下村はこれを日本独特の状況だとしている。

下村はしばしば国民の集団ヒステリーについて言及している。すでに昭和二（一九二七）年の金融パニックを、「拳国一致して無我夢中で自分達の首をしめてゐた」と分析していた。昭和一四（一九三九）年頃には、大衆に「浪のうねり」のような勢いがあると主張している。この「満州事変以来の大きな浪のうねり」をいかに制御するかが、日本放送協会会長や情報局総裁となった下村の課題だったのである。下村が政治について論じる際、しばしば強調する考えがあった。

輿論は正しいといふ。しかし之れは大体に於て正しいといふまでである。⁽⁹⁾

長くマスメディアに携つてきた下村は、「輿論を指導してゆくのは極めて少数の先覚者である」と考えていた。

戦争末期の「輿論」は一億玉碎であった。正確にいつ頃詠んだのかは不明であるが、次のような下村の和歌が残っている。

地上より大和民族うせよとか一億玉碎何ぞやすき⁽¹⁰⁾

鈴木内閣が最も恐れた相手は、アメリカ軍ではなかった。もちろんソ連軍でもない。下村は「我等の決心は何か。それは敵の爆弾では無い、国内の相剋である。特に閣員となるからは外からの爆弾よりも内よりの銃火である」と述べた。他にも「内には竹槍戦法を叫び、瓦全よりも玉碎を呼号し、死中活ありとて全国焦土となるまで徹底抗戦す

べしといきまく声がある」とか、「国内の輿論もいよいよ本土決戦でといふ空声が強く、一億玉砕を呼号してゐる」と当時の状況を描写している。こうした「空声」は、往來を歩いていても自然に聞こえてくるラジオによるものと考えて良いであろう。鈴木内閣を悩ませたのは、放送で一億玉砕を叫ぶ「国内の輿論」や、「今日まで宣伝に乗ってきた大衆の気分」であった。

ここで重要なことは、下村が必ずしも軍部だけを悪しき存在と考えていなかったことである。軍部にやや同情してか、次のようにも言っている。

戦局の実相はあまりにも知られずにあつた。第一線の軍にも中央の軍にも、さらに情報局総裁にも、陸海軍の報道部長にも、陸海相にすら、首相にすら、存外知らされずにあつた。此の如くにして軍も国民も、必勝の信念に盲進をつづけたのであるから、和平降伏への百八十度の転換には軍民の間どころか、軍自体の間にも深刻なる相剋摩擦を起し、支離滅裂、血で血を洗ふ惨状を来す危険性は多分にあつた。⁽¹⁵⁾

国の情報機関の長となつた下村の目に映つたものは、「必勝の信念」で一致するよう見えるも、実際は全くまとまりのない国内の状態であつた。ラジオ受信機や放送施設は全国へ波及したが、当時の放送は日本放送協会によって「独占された上、其言論、ニュースの上に八釜しく制限される」状態であり、錯綜した状況をもたらしていたのであ

る。玉音放送は、このような混乱した「輿論」を是正するために発想されたのであつた。仮に戦争を続行するにしても、天皇の声によって正しい情報が提供されれば、やがて終戦の必然性が人々に理解され、しかる後に終戦が可能になると考えていたようである。下村にとって玉音放送は、天皇による終戦の宣言でも良かったが、必ずしもそれこだわらなかつた点は重要である。⁽¹⁶⁾

以上をまとめると、次のように言えるであろう。情報や交通は自然現象のように発展する。その「天則」に沿うために、道州制を布き、觀光立国の戦略を練り、物価に対する国民の「心構へ」も変えるべきである。同様に情報の発展は、「大きな浪のうねり」を生み出し、「一億玉砕」という歪んだ「輿論」を生成した。それを玉音放送によって矯正すべきだと下村は考えたのである。下村による数々の政策提言と玉音放送は、このように交通や情報の発達に対処するという意味では、類似した発想が根底にあると解釈できるのではないか。

戦前から下村は「近頃の社会思潮は自由平等をはきちがへてゐる」と指摘していた。これが戦後になると、「権利の主張にのみこれ急に、義務の履行をかえり見ない民主主義をはきちがえた日本の現状」を批判するようになる。⁽¹⁷⁾人々によるこうした「はきちがへ」は「大きな浪のうねり」と通ずるものがある。「民主主義のはきちがえ」は、戦後になると松下幸之助も主張するようになる。

IV 今後の展望

本稿では、まず下村宏の事績を順に追う形で紹介した。特にマスメディアと下村の関わりについて幼少期から注目した。下村は、他にもハンセン病患者救済、漢字制限、アイバンクの普及、遺言の奨励など多彩な活動を行なっている。本稿では議論が煩雑になるので、これらは省略した。財政学や人口論については、今後の課題である。

松下幸之助研究としては、戦後の下村の方が重要である。しかし、まずは従来ほとんど研究がなされていない戦前の下村について考察する必要があると判断した。下村の戦後の事績については次稿の課題としたい。また幸之助による道州制や観光立国の提唱は、下村の主張とよく似ている。両者の主張は同じでどのような違いがあるのか、その詳細の分析も必要である。両者の提言の異同については次稿で扱う予定である。

【注】(文献による表記が「下村海南」であつても「下村宏」に統一した)

- (1) 坂本慎一「高島米峰と松下幸之助をめぐるラジオ―昭和八年までを中心に」『論叢 松下幸之助』第4号 (P.H.P.総合研究所、二〇〇五年)、同「戦前における友松圓諦の真理運動―高嶋米峰、松下幸之助との連関と共に」『論叢 松下幸之助』第5号 (P.H.P.総合研究所、二〇〇六年)。
- (2) 新政治経済運動について幸之助は、松下幸之助『道は明日に』(毎日新聞社、一九七四年) 一三三―一六頁で回顧しており、「二〇

にいて民主主義の研究と普及がねらいでした」と説明している。松下幸之助・田川五郎「明日をひらく経営―私の世界」シリーズ―(読売新聞社、一九八二年) 一〇頁。

- (4) 先行研究としては、鈴木實「海南下村宏の吟味・分析した『北米合衆国の郵便貯金創立事情』について」『貯蓄経済理論研究会年報』一四号(貯蓄経済研究室、一九九九年)。その他、学術的ではないが、寺門克「野生の官僚 和平の言論人 下村宏(一―六)」『通信協会雑誌』一〇六九―七四号(通信協会、二〇〇〇年)がある。

- (5) 下村宏『随筆二直角』(桜井書店、一九四二年) 八一頁では関東大震災による焼失、下村宏『日本はどうなる』(池田書店、一九五三年) 一八三、二〇〇頁では太平洋戦争による焼失、同前六七頁では戦後の火事による焼失を語っている。日記は震災による焼失は免れ、空襲までは残存していたようである。

- (6) 下村正夫編『故海南歌集歌歴』(下村文発行、一九五九年) 一二四―七頁に「下村海南博士著書総目録」があり、六七冊の書が紹介されている。これに漏れた下村の書として、『下村海南先生伊豆めぐり』(伊豆循環鉄道期成同盟会、一九二七年)、『時局と放送』(東洋経済新報社、一九四四年)、『国民の心構へ』(翼賛図書刊行会、一九四四年)、『八・一五事件』(弘文堂、一九五〇年)の四冊があり、計七一冊が確認できる。

- (7) 下村房次郎の経歴は、下村宏『思ひ出草(二黒の巻)』(日本評論社、一九二八年) 二二三頁、同『南紀人材論』(紀伊毎日新聞社、一九一四年) 一六六―七〇頁、同『我等の暮し方考え方』(池田書店、一九五三年) 二二四頁など。その他、下村房次郎『自知即』全三巻未完(吉川弘文館、一九〇六年)もある。

- (8) 下村宏『刺客漫談』(四条書房、一九三二年) 一九一頁。
- (9) 下村宏『随筆通風筒』(四条書房、一九三四年) 一九五頁。

- (10) 下村宏『人口一億』(第一書房、一九三六年) 三九〇頁。
- (11) 前掲『人口一億』三五九頁。下村は、坪内逍遙の授業が特に面白かったと証言している。
- (12) 下村宏『さし潮ひき汐』(日本評論社、一九二九年) 二二〇頁。明治二三(一八九〇)年に高等中学校に入学したとすると、満一五歳で入学したことになる。下村宏『はきちがへ』(四条書房、一九三三年) 七一頁でも明治二三年に第一高等中学校に入学したとしている。前掲『故海南歌集歌歴』所収の「下村海南年表」によると明治二五(一九九二)年、数え年一八歳で第一高等中学に進学となっているが(前掲『故海南歌集歌歴』二六頁)、誤りではないだろうか。
- (13) 前掲『さし潮ひき汐』二二〇頁。
- (14) 下村宏『皮と肉』(日本評論社、一九二七年) 四三四頁。
- (15) 前掲『南紀人材論』五二〇頁。
- (16) 下村宏『趣味と青年』(潮文閣、一九四三年) 二三七頁。前掲『南紀人材論』四六九頁では、和歌山時代には周囲の人も旅行やスポーツをしなかったが、この第一高等中学校に入ってからの下村は旅行やスポーツを積極的に始めたと述べている。
- (17) 下村宏『昭和の維新』(第一書房、一九四〇年) 一一七頁。
- (18) 下村宏『一期一会』(人文書院、一九四二年) 三六七頁。
- (19) 同前三六六頁。
- (20) 前掲『我等の暮し方考え方』二九七頁。
- (21) 同前一九四頁。
- (22) 同前一九八頁。この表現では和田垣が下村に個人的に声をかけたように受け取れるが、下村宏『呉越同舟』(四条書房、一九三二年) 二二六頁では、和田垣から「通信省は入省者に洋行さすから、有志の諸君は出かけて見給へ」という話があったとしている。
- (23) 前掲『我等の暮し方考え方』二一五頁。
- (24) 下村宏『非常時漫談』(四条書房、一九三三年) 一一一頁。
- (25) 前掲『皮と肉』三五頁では「電気監督の係長」であったと述べている。
- (26) 下村宏『日本の底力』(第一書房、一九四一年) 二三頁。
- (27) 前掲『非常時漫談』二九六頁。
- (28) 前掲『随筆二直角』五一〜三頁。
- (29) 下村宏『思ひ出草(一白の巻)』(日本評論社、一九二六年) 一三三頁。
- (30) 同前一三五頁。
- (31) 同前一三四頁。前掲『随筆二直角』五六頁では「戦争は敗けるものではない」と書いている。
- (32) 前掲『我等の暮し方考え方』二〇二〜三、二二七頁。「留学」は「出張」に比べて、旅費や俸給が非常に少なかったとしている。
- (33) 下村宏『朝鮮・満州・支那』(第一書房、一九三九年) 二六九頁。
- (34) 前掲『皮と肉』二〇四頁。
- (35) 前掲『呉越同舟』三六八頁。当時の台湾総督を「安東大将」(前掲『思ひ出草(二黒の巻)』一〜一二、一五四〜六頁)が総督となったようである。下村の前任者は「内田嘉吉」(前掲『日本はどうなる』一七八頁)としている。
- (36) 前掲『朝鮮・満州・支那』四二頁。
- (37) 下村宏・飯島幡司『遍路』(朝日新聞社、一九三四年) 一九七頁。
- (38) 前掲『昭和の維新』二〇九頁でも同様のことを述べている。
- 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 資料三』(東京大学発行、一九八六年) 五八五頁によると、この年、総長推薦で二人、大学院修了によって一人の法学博士が誕生しており、論文提出はいなかった。下村は台湾在住であり、大学院に進学してい

- ないので総長推薦と判断した。
- (39) 下村宏『持久戦時代』(第一書房、一九四〇年)二九六頁。
朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』
(朝日新聞社、一九九一年)一四九頁。
- (40) 下村宏『南遊記』(朝日新聞社、一九三五年)三二二頁。
下村宏『東亜の理想』(第一書房、一九三七年)二六八頁。
下村宏『南船北馬』(四条書房、一九三二年)二四九頁。
前掲『時局と放送』一頁。
- (41) この「新聞の弁」は、「大正十四年三月東京芝浦に於ける東京中
央放送局のラヂオ試験放送にかかりしもの」(下村宏『新聞常識』
〔日本評論社、一九二九年〕一九四頁)とされている。「仮放送」
ではなく「試験放送」としていているところや、三月の放送であるこ
と、下村の著書の中にこれより古いラヂオ演説筆記が見当たらない
ことなどから、これが最初の放送演説であると判断した。
- (42) 下村宏『盗忠』(日本評論社、一九三〇年)二二八頁、下村宏『鮎
ん棒』(日本評論社、一九三〇年)六一頁など。
- (43) 下村宏『終戦秘史』(講談社、一九八五年)二二四頁。
高嶋米峰『高嶋米峰自叙伝』(学風書院、一九五〇年)「追憶」一
五七頁。
- (44) 『真理』(真理運動本部)昭和一三(一九三八)年九月号、七八頁。
前掲『はきちがへ』五二頁。
- (45) 前掲『日本はどうなる』六七頁。
前掲『はきちがへ』一一二頁。
- (46) 前掲『東亜の理想』四二〇～一頁。朝鮮ではほとんど知られてい
なかつたと述べているところもある(下村宏『物の糧心の糧』
〔第一書房、一九三八年〕一〇四頁)。
- (47) 前掲『一期一会』二二二頁。
前掲『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』四六四頁。前掲『我等
の暮し方考え方』四七頁では「軍部の抗議」、下村宏『終戦記』
(鎌倉文庫、一九四八年)八頁でも「軍部の反対」と書いている。
前掲『東亜の理想』二六七頁。
碑にきざまれた和歌は「眼ざむれば松の下草を刈る鎌の音さやに
聞ゆ日和なるらし」であった(同前二七〇頁)。
秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』(東京大学出版会、二〇〇
二年)二六九頁より。前掲『故海南歌集歌歴』一一二頁では、勅
撰で議員になったとある。
- (48) 前掲『終戦記』四頁。
前掲『朝鮮・満州・支那』一五二頁。
下村宏『来るべき日本』(第一書房、一九四一年)二八七頁。
前掲『日本の底力』二八四頁。
同前三二二頁。
- (49) 前掲『昭和の維新』九二頁。
前掲『物の糧心の糧』一六五頁。
下村宏『生活改善』(第一書房、一九三八年)一三五頁、前掲『物の
糧心の糧』二二二頁。
前掲『生活改善』一三三頁。
同前一四七頁。
- (50) 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史』上巻(日本放送出版
協会、一九六五年)五一〇頁。日本放送協会による『日本放送史』
は他に、一九五一年版があるので、ここでは『日本放送史』(一
九六五年)と表記する。
- (51) 前掲『終戦記』一四頁。
同前一〇八頁。
大宅壮一編『日本のいちばん長い日』(角川書店、一九七三年)六
二頁。
- (52) 前掲『終戦記』六頁。

- (74) 例えば、前掲『東亜の理想』二一九頁で「日支共に長期にわたる全面戦争など望ましくなく、早いところで片附くるに越したことはない」と述べている。
- (75) 前掲『日本放送史』上巻（一九六五年）五一八―二〇頁。
- (76) 前掲『終戦記』六九頁。この「運動」は主に外交について述べているようである。具体的に何をしたのかは不明である。
- (77) 同前九九頁。下村は、玉音放送に向けて七月下旬にはすでに動いていたのである。これは注82で述べるように、玉音放送の発案者は誰なのかということを明らかにする上で、決定的な証言である。
- (78) 同前一〇〇頁。
- (79) 前掲『終戦秘史』八七頁。
- (80) 前掲『終戦記』一〇五頁。
- (81) 同前一〇頁。
- (82) 従来、下村の部下であった久富情報局長が玉音放送の発案者であったという指摘が一部にある（読売新聞社編『天皇の終戦』〔読売新聞社、一九八八年〕一三一頁、竹山昭子『玉音放送』〔晩聲社、一九八九年〕二四―五頁）。これは下村の秘書官であった川本信正の証言を紹介した読売新聞の記事が根拠となっている。しかし、この記事は、いくつもの点で疑問がある。第一に、この証言によると久富による下村への進言は八月一日であったが、すでに本文で書いたように下村は七月下旬から玉音放送に向けて動き出していた。第二に、下村は「和戦いずれの際にも」（前掲『日本のいちばん長い日』一五頁）玉音放送を実現しようとしていたのであって、終戦のための「ひとつの形」として玉音放送を発案したとする読売新聞の記事とは、内容的に齟齬が大きい。下村自身は玉音放送の発案者は自分であると何度も明言しており（前掲『終戦秘史』八八頁、前掲『終戦記』一〇八頁など）、読売新聞のこの記事は下村本人の証言を何の説明もなく無視している
- (83) 前掲『終戦記』一一〇頁、前掲『終戦秘史』八八頁では「いろいろと参考になった」。
- (84) 前掲『終戦記』一二六頁。
- (85) 同前一二七頁。
- (86) 前掲『終戦秘史』一〇七頁。一方、鈴木一編『鈴木貫太郎自伝』（時事通信社、一九六八年）二九八頁は「ご聖断」としている。
- (87) この時の昭和天皇の言葉を、最も正確に書き残したのは下村であるとされている。前掲『日本のいちばん長い日』三〇一頁。
- (88) 前掲『終戦記』一五一頁。
- (89) 前掲『終戦秘史』一五〇頁。
- (90) 同前一五六―七頁、前掲『終戦記』一六二―三頁、前掲『日本のいちばん長い日』一五五―九頁。
- (91) 前掲『日本のいちばん長い日』一五八頁。
- (92) 前掲『終戦秘史』一五九頁。
- (93) 前掲『日本のいちばん長い日』三〇五頁。
- (94) 前掲『終戦秘史』一八一頁。
- (95) 同前一七二頁。
- (96) 前掲『終戦記』一六六頁。前掲『終戦秘史』二二四頁には、官邸に戻り「夢ならぬ夢をしのびながら横になる」とある。しかし放送まで数時間しかなかったため、ほとんど寝る間もなかったものと想像される。
- (97) 前掲『日本放送史』上巻（一九六五年）五六九、六四一頁。

- (98) 前掲『終戦秘史』二二四頁。
- (99) 前掲『日本のいちばん長い日』三〇九頁。
- (100) 前掲『日本放送史』上巻(一九六五年)五六九頁。前掲『日本のいちばん長い日』三〇九頁では下村の締めくくりの言葉を「謹みて天皇陛下の玉音放送を終わります」としている。
- (101) 前掲『日本放送史』上巻(一九六五年)五六九頁。下村が述べる前に和田アナウンサーが前置きをし、最後は下村の後にも和田が解説を加えたが、和田の前後の言葉は「玉音放送」に含まれていない。
- (102) 前掲『終戦秘史』一七八頁。
- (103) 同前一一三頁。
- (104) 前掲『終戦秘史』一八四頁、前掲『終戦秘史』二三四頁。
- (105) 前掲『終戦秘史』一八〇頁。前掲『終戦秘史』二二九頁では「群集」。
- (106) 前掲『終戦秘史』一八五頁。
- (107) 同前一一七頁。
- (108) 前掲『日本はどうなる』七〇、七九頁。
- (109) 以下、下村宏『プリズム』(四条書房、一九三五年)三―一二頁における、下村による幸之助の紹介記事から随時引用する。
- (110) 同前四―五頁。
- (111) 同前七頁。
- (112) 松下幸之助『私の行き方考え方』(PHP研究所、一九八六年)二四三頁。
- (113) 前掲『プリズム』一二頁。この最後の記事だけ「十一月号」と明記されている。『初しぐれ』が月刊誌であったのかどうかは不明である。
- (114) 前掲『プリズム』一〇頁。
- (115) 下村宏『これからの日本 これからの世界』(新潮社、一九三六年)。
- (116) 松永定一『新北浜盛衰記』(東洋経済新報社、一九七七年)二五〇頁。
- (117) 前掲『盗忠』一九九―二〇〇頁。「悪友」とは、学生時代の下村を遊郭に連れて行ったのは自分だという意味らしい。
- (118) 前掲『我等の暮し方考え方』三〇〇頁。
- (119) 下村宏『動く日本』(第一書房、一九三九年)二二二頁。
- (120) 前掲『南船北馬』序二頁。
- (121) 前掲『日本の底力』二八頁。
- (122) 同前六二頁。
- (123) 前掲『南遊記』二七、一八四頁。
- (124) 前掲『持久戦時代』三五二―三頁。
- (125) 前掲『南紀人材論』自序二頁。もともと父・房次郎は「紀伊の国たる、南海に僻在すと雖も、由来人材を出したる事少なしとせず」(前掲『自知即是』二―三〇頁)としており、基本的な認識は宏とは異なる。
- (126) 前掲『南紀人材論』一〇四頁。
- (127) 同前八五頁。
- (128) 同前八七頁。
- (129) 同前一一一頁。
- (130) 前掲『人口一億』一五七頁。
- (131) 同前二四八頁。
- (132) 前掲『はきちがへ』五二二頁。
- (133) 同前一〇三頁。
- (134) 前掲『随筆通風筒』三五五―六頁。
- (135) 前掲『東亜の理想』三六四頁。
- (136) 同前三七五頁。
- (137) 下村宏『本卦かへり』(四条書房、一九三五年)四六二頁。
- (138) 前掲『終戦秘史』二九頁。
- (139) 下村宏『世界と日本』(朝日新聞社、一九三二年)四一四頁。

- (140) 前掲『遍路』二六七～七六頁。
- (141) 前掲『終戦記』二六頁。
- (142) 前掲『我等の暮し方考え方』六五頁。
- (143) 前掲『プリズム』二二〇頁、前掲『遍路』三六頁。
- (144) 前掲『趣味と青年』二二九頁、前掲『非常時漫談』三三八頁。
- (145) 前掲『我等の暮し方考え方』二〇五頁。
- (146) 前掲『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』一四九～五一頁。
- (147) 下村宏『欧米より故国を』(予未出版社、一九二二年)一頁。
- (148) 同前四一七頁。この時、東京で平和博覧会が開催されていたので、すぐには東京へ戻れなかったと書いている。
- (149) 前掲『刺客漫談』一八一～四頁。
- (150) 前掲『呉越同舟』二七九～八八頁。
- (151) 前掲『はきちがへ』一九三頁。前掲『故海南歌集歌歴』一二〇頁では、昭和七年の能登訪問をもって「六十六カ国」踏破としているが、これは間違いであろう。
- (152) 前掲『生活改善』二四五頁。
- (153) 前掲『一期一会』三三六頁。
- (154) 同前三四〇頁、前掲『持久戦時代』三六頁。
- (155) 前掲『南遊記』六頁。
- (156) 前掲『遍路』序一頁。
- (157) 同前跋一～二頁。同様のことを下村自身も書き、起床は朝の六～七時であったと書いている(同前一九一～一九二頁)。
- (158) 前掲『動く日本』一七四～七頁。
- (159) 前掲『南遊記』一六頁。
- (160) 下村宏『五番茶』(博文館、一九二七年)二四七頁。
- (161) 前掲『生活改善』一六七頁。
- (162) 前掲『国民の心構へ』一一～二頁。
- (163) 同前五〇頁。
- (164) 前掲『生活改善』七五頁。
- (165) 同前三三七～九頁。
- (166) 同前三四四頁。
- (167) 前掲『皮と肉』一七四頁。他にも下村宏『下村宏博士大講演集』(大日本雄弁会講談社、一九二八年)五一頁、前掲『世界と日本』三四二頁、前掲『新聞に入りて』四六九頁、前掲『来るべき日本』二四四～六頁など、この主張は頻繁に見ることができる。
- (168) 前掲『生活改善』五七頁。
- (169) 前掲『皮と肉』二三九頁。
- (170) 前掲『持久戦時代』三一五頁。
- (171) 前掲『終戦記』一三四頁。同一四六頁でも「意地面目といふ大きな波のうねり」と述べている。
- (172) 前掲『はきちがへ』四七八頁。前掲『非常時漫談』二三二頁では「輿論は大体において正しい。しかしいつも正しいとはいはれぬ」と述べ、前掲『皮と肉』一四七頁では「輿論はいつも正しいもの、よいものとは限られていない」と主張している。
- (173) 前掲『皮と肉』一八五頁。
- (174) 前掲『終戦秘史』一三九頁。前掲『故海南歌集歌歴』七九頁では、入閣後の歌としている。
- (175) 前掲『終戦記』七頁。
- (176) 同前七〇頁。
- (177) 同前八九頁。
- (178) 前掲『終戦秘史』四二頁。阿南惟幾・陸軍大臣の言葉として紹介している。
- (179) 前掲『終戦記』一九三頁。
- (180) 前掲『南船北馬』二四八頁。
- (181) 下村にとって玉音放送は「一億玉碎」の「輿論」を矯正することが本質的な目的であった。従って、内閣が終戦を決定しなかった

としても、玉音放送を行なう意味はあったのである。この場合の玉音放送は、八月八日の言上の内容から、「信賞必罰」によって軍部の責任を問いつつも「君臣の親和」を訴え、「出来るだけ国民に真相を知らしめる」(前掲『終戦記』一〇二頁) ような内容になったと想像される。この玉音放送によって、やがて終戦が「輿論」になれば、事後的に内閣が終戦を決定しても良いのであった。結果的には、昭和天皇が早い段階で御聖断を下したため、内閣による終戦の決定が先となり、玉音放送はその決定を伝える内容となった。しかしこの場合でも、国民が実際に終戦を受け入れて戦闘行為を止めることが「輿論」にならなければ意味がないのであり、下村は内閣解散後もそれを心配し続けたのである。

(182) 前掲『刺客漫談』三三七頁。

(183) 前掲『我等の暮し方考え方』九七頁。

(184) 下村が「はきちがへ」という言葉を好んだのは、杉村楚人冠が下村はしばしば靴の右と左で違う靴をはくことがあると暴露していたことに関係があるかも知れない(前掲『はきちがへ』一六頁)。

(185) 松下幸之助『崩れゆく日本をどう救うか』(PHP研究所、一九七四年) 七七頁。

(さかもと・しんいち PHP総合研究所第一研究本部松下理念研究部主任研究員)